

2023年6月24日

多摩福祉会評議員理事の皆さま  
職員、職員 OBOG の皆さま  
関係者の皆さま

垣内国光

## 理事長離任のご挨拶

本日、理事会にて安川信一郎新理事長が選任され、理事長職を離任いたしました。皆さまに直にご挨拶すべきところですが、文面にてお伝えすることをご容赦ください。

正直なところほっとする反面、一抹の寂しさもあります。前理事長の具合が悪く晴天の霹靂で私が理事長を拝命したとき、引き継ぎをすることはまったくできませんでした。何が重要で何が優先事項なのかも皆目分からず、不安と緊張のなかにありました。スムーズに理事長交代をさせていただけることは本当にありがたいことです。

私は当法人の理事を二度仰せつかっています。1985年ころから1991年までと2003年から現在までです。2002年に日本福祉大学から明星大学に移籍し、東京に戻ってから再び理事を拝命しました。2014年に理事長になりましたので理事長職を9年ほど務めたことになります。

なぜか私は多くの師に恵まれてきました。私にとって特別な先生が3人おります。朝日訴訟など社会保障福祉裁判のレジェンド学者である小川政亮先生（おがわまさあき、日本社会事業大学、日本福祉大学、金沢大学等）、社会学の視点から福祉を分析した泰斗、真田是先生（さなだなおし、立命館大学、総合社会福祉研究所所長等）、そして当法人を設立した浦辺史先生（うらべひろし、日本福祉大学、全国保育団体連絡会会長等）です。いずれの先生にも本当によくかわいがっていただきました。特に浦辺先生は、戦前なんども投獄され苛烈な人生を歩んだにもかかわらず穏やかな方で、人のために生きることの意味を学ばされることの多い先生でした。人生の師といってもよい先生でした。生意気だった私が少しはまともになったのは浦辺先生の影響かもしれません。その浦辺先生の遺志を継いで理事長になったのですから、理事長職が重く感じたというのが率直な気持ちでした。

理事長を引きうけた時、二つの困難がありました。一つは、まだ明星大学に奉職中で組合の委員長、学部長など要職にあり、かなり多忙だったことです。権威主義的で非民主的な明星大学の運営と経営にもの申すべく、学内リベラル勢力を結集して民主化闘争や学長選などを闘ってもしました。恥ずかしい話ですが、余りに多忙で普通は若い女性が罹るバセド一病をその頃に患っていました。医者もまさか60代の男性が罹るとは考えられなかったようで診断がつくまで三ヶ月以上かかりました。笑い話です。

もう一つの困難は、社会福祉の基礎知識は多少ありましたが、社会福祉法人経営のことはまったく素人だったことです。当時の幹部も法人経営のことはほとんど分かっていなかった

たのではないのでしょうか。まったくの手探りでした。書類のありかが分からないだけでなく、法人本部もなく施設長間で情報が共有されておらず、意思決定の場も判然としていない法人でした。空をさまよっているようでした。理事長の任務を全うできるか、しばし困惑したことを覚えています。私は力がありませんでしたので、正直に自分を開き皆さんに頼るしかありませんでした。当初の数年は本当に苦勞しました。

そんな状況下で、幹部と協議して実施したことは二つです。ひとつは経営会議設置です。経営会議で各拠点の情報を共有し、そこでしっかり議論して法人の諸問題を処理し、評議員会理事会にあげる議題を整理する仕組みを作ったのです。二つ目は、理事会や経営会議を支え情報センターともなる法人本部を設置したことです。当初は、こうした体制の変化に抵抗もありました。当時の本部職員には本当に苦勞をかけたと思います。

今にして思えば当たり前のことですが、その当たり前を定着させるまでが一苦勞でした。次第に民主的に法人を運営することが根つき始めると、俄然、多摩福祉会の本領が発揮されるようになっていきました。組織的になっていきまし、なにより明るくなりました。職員のパワーを感じずるようにもなりました。法人には多様な能力をもった職員がおりますが、その職員一人ひとりの能力が開花していくのを見るのは本当に心地よいことでした。私のようないい加減な者が理事長職を全うできたのは職員の支えがあったからです。特に本部職員には本当にお世話になりました。また、安川常務理事、佐藤理事をはじめ評議員、理事、監事に支えられているという感覚をもったのは再三です。まことに幸せな理事長だったと言えると思います。私はピンチに登板した中継ぎ投手のようなものです。天国に行くことができたなら、なんとか次の投手である安川信一郎さんにバトンタッチできたと浦辺先生に報告できることが楽しみです。

最後に雑感的希望です。

第一は、法人経営は安定にも配慮しなければなりません、さらに実践と経営と研究を深め発展させていって欲しいということです。それも硬直的な実践論や研究論、経営論ではなく、時代にあわせて自らの頭で考えしなやかに創造していく必要があると思います。まだまだ硬いところがあるように思いますので。

第二は、法人のなかだけに注目するのではなく、法人内外の実践や経営、運動にも深く関わって欲しいということです。浦辺先生がよく仰っておられました。「一生懸命やっているだけでは足りない。子どもや社会に何が求められているかよく考え実行しなければならぬ」と。さらに社会的発信力を強め、法人内外の任務を負うことのできる力をつけていかなければなりません。法人はこうした力を蓄えつつあります。その力が役立つときが必ず来ると思います。

多摩福祉会はみんなのものです。社会の財産です。困難に遭遇し立ち止まる時もあるでしょうが、この法人が頑張らなければ、幸せからこぼれてしまう子どもやご家族がいることを忘れてはなりません。私も残された時間と衰えつつある力を多摩福祉会のために献げます。ありがとうございました(\*'-\*)